

学 長 荒 川 正 昭

「大学は真理を探究する学問の府である」と言われますが、我々教員もその職務は何かと問われます。教授に就任して挨拶をしますと、皆さんは必ず「教育と研究の二つを車の両輪の如く大事にしたい」と言われます。

私のような医学部の臨床医学講座の教授は、医師でありますので、「臨床と教育と研究の三本柱であります」と申します。最近は大いぶ変わってきましたが、かつてその実態は、「一に研究、二に研究、三、四がなくて、五に研究」であり、教育は無視されているという厳しい批判もありました。

しかし、それではいけない。大学は教育の府でもあります。先生方の職名は、「教授」教え授ける、「助教授」教え授けることを助ける、或いは、「講師」講義を行うという職名を頂いているわけでありますから、教育は研究に劣らず重要であると考えます。

自分自身を振り返ってみますと、「文部教官」になりましたのは、昭和45年でありまして、昭和35年に大学を卒業してから10年後にようやく公の身分を得たのであります。その頃は、実際に教育のことなどは、全く考えていなかったようです。自分は医師であり、現場の職人であり、研究者であると思っており、病院と学会だけが自分の舞台でした。教える学生に対しては、「私自身が一所懸命していればそれで良い。学生は、私の背中を見てくれれば良い」といった気分が多分にありましたし、現在でも、大学にはそういった気風が残っているかも知れません。

実際に教員の選考を行う際には、勿論、研究業績は十分に検討しますが、それ以外に、人柄であるとか、管理・運営能力などもみるわけです。私がおりました医学部では、これに加えて優れた臨床医であるということがありました。患者さんを的確に診ることができる、手術が上手に出来るということです。手術ができない外科医では、どんなに英文の論文が多くとも、話にならないわけであります。人を選ぶということはなかなか難しいことですが、従来であれば、研究だけやっていたら良かったのですが、これからは教育への姿勢、教育の能力も大切であるということが言われてきています。

私自身は、自分が一所懸命患者さんを診察していれば、また講義をしていけば、それを見ている学生達は、立派に育ってくれると思っておりました。ところが、昭和47年に新設の私立医科大学である川崎医科大学に赴任しましたところ、そこでは学長先生以下全ての先生方が、「医学教育学」を勉強していて、学生により良い医学教育を行うために、大変な努力をしていることを目の当たりにして、ショックを受けました。私の最初の講義の時、一番後ろの席に学長先生が座っておられ、講義終了後に先生から呼ばれました。そして、「先ほどあなたの授業を聞いたが、私にはよく分からなかった。私が分からないのだから、学生が分かるはずがない。」と怒られました。初めて「医学教育学」というものがあることを知り、医学教育学会に入会し、医学教育セミナーに参加して、「医学教育」の実験を学んだのであります。最近では、このような教育企画が全国的に定着して行われるようになりました。本学では、医学部がやっていることは知っていましたが、それぞれの

学部でも行われていることと思います。

大学の教員は、教員免許がなくても教育ができる唯一の教員ですが、「それでは駄目だろう」ということで、今、各大学において、ファカルティー・ディベロップメントの必要性が言われています。本学においても、ファカルティー・ディベロップメントが行われることになり、たいへん喜んでいますが、ぜひこの芽を摘まずに伸ばして行き、新潟大学の次代を担う優秀な人材を育てることが大事だと思います。

今日の早朝に行われた就職指導講演会で、広島大学学生就職センター長の西川教授から、「学生の出口（就職）の問題は、大切である」こと、また、「今、外部評価等の重要性が言われていますが、学生がきちんと就職できるか否かが、もっとも厳しい社会的評価である」とのお話をお聞きしました。

只今、昨年10月に出されました大学審議会の答申を受けて、新潟大学としてどう対応していくかを検討しているところであります。これに対して反対意見もありまして、「あんな答申では、日本の大学は良くならない」との意見があることも事実です。これは、国の行財政改革とも関係がありますし、我が国の大学を世界に通用するレベルに向上させなければという考えもあり、さらに国の税金を使っている国立大学が本当に国民のために有効に機能しているだろうかという疑問があることにも関係していると思います。私は今回の答申に対して、前向きに検討して対応しなければならないと考え、学内で検討して頂き、1月に新潟大学の将来構想としてまとめ、全教員へ配付しました。

その中では、私たちの夢を語っているわけです。実は、大学審議会の答申が出た際に、国立大学長会議に於いて当時の町田文部大臣から、「国立大学が、今のままの姿で、来世紀に存在するとは考えていない。おそらくかなり変わるだろうし、変わらなければいけない。場合によっては、半分くらいの大学は無くなるかもしれない。生き残るか残らないかは、各大学の努力しだいである。」という、かなり過激な発言であったのです。このような大きな変化の流れがあることは事実であり、各大学でそれぞれに対応してほしいとのことでした。私は、新潟大学としても、積極的に対応すべきであると考えています。

現在、わが国においては、旧帝大を中心として、大学院重点化が進んでいますが、文部省はこれで終わると言っています。しかし、現実には、それ以外の総合大学の特定の学科・学部の重点化も図られています。このような時期に、新潟大学が置かれている立場を考えますと、本学の歴史と現状から判断し、来世紀も我が国の学際的な基幹大学として活躍できる可能性を有していると私は考えます。また、新潟大学が在る日本海沿岸地域、北東アジア圏においても、地域及び国際的な拠点大学として活躍できる力を持っていると考えます。

新潟大学が今後一層発展して、我が国の基幹大学としてその地位を保つためにどうしたら良いのか、皆さんと一緒に考えたいという願いを込めて、あのまとめを作成しました。

まとめた内容につきましては、学長の独断と偏見であったり、突っ走りであるという批判もあるかと思いますが、しかし、私は、これまで私自身を育ててくれた母校を愛する一人として、今後の流れを十分見極めて、新潟大学のために頑張りたいと考えています。

ファカルティー・ディベロップメントの一つである今日の機会に、皆さんと一緒に考えていただき、ご意見を頂きたいと思います。

(平成11年3月8日開催 第1回全学FDの学長あいさつより)